

温古知新⑧ 小泉八雲『怪談』雪女 1
笑顔礼讃西東

東京広軌俳句会様(埼玉県・越谷市) 2~3

東葛川柳会様(千葉県・我孫子市) 3~4

花柳雪舟様(東京都・世田谷区) 5

投稿作品 6~10

心に残った作品 10

詠み人スクランブル(記憶にある一番最初のクリスマス) 11~12

ニユースあれこれ 13

お客様の「リレーエッセイ」 山口景昭様 14

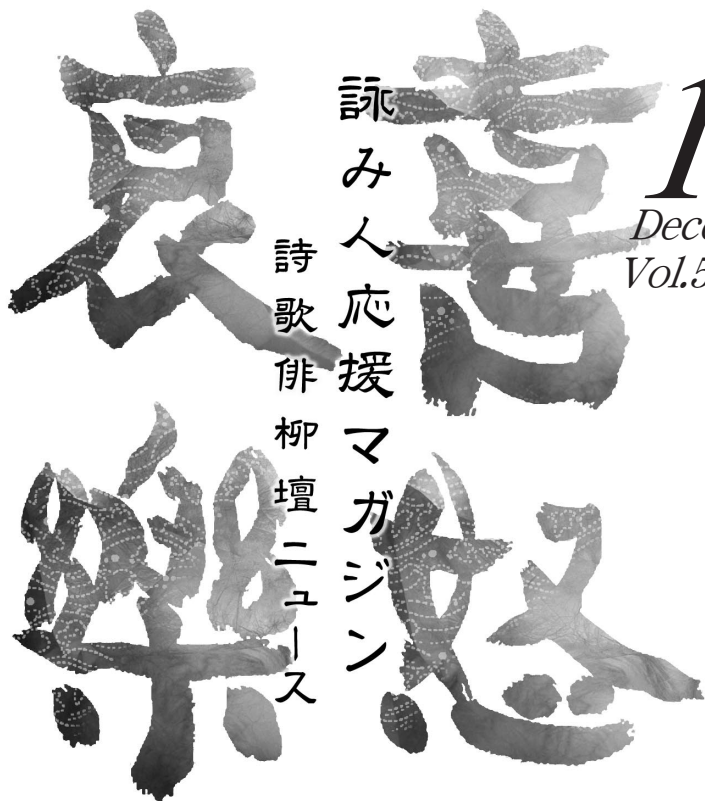
新潟ぶらり／海の洋館ネルソンの庭／冬の日本海 15

詠み人の「リレーエッセイ」 俳人森賀まり様 16

12
December
Vol.53

詠み人応援マガジン

詩歌俳柳壇ニユース



暑かった夏も終り、季節は秋を通り越して冬。地域によつては、もう雪が降ったところもあるのではないでしょう。そんな雪の季節に、小泉八雲の『怪談』より有名なお話を紹介します。

『怪談』は、小泉八雲(パトリック・ラファディオ・ハーイン。1850年6月27日-1904年9月26日)が著した怪奇文学作品集です。八雲の妻である節子から聞いた日本各地に伝わる伝説 幽霊話などを、独自の解釈を加えて情緒豊かな文学作品として魅せました。17編の怪談を収めた「怪談」と3編のエッセイ「虫界」の2部構成。有名なところでは、「耳なし芳一」や「むじな」があります。

そんななか、この季節にぴったり(?)な話が「雪女」。そのあらすじは……

武蔵の国のある村に、茂作と巳之吉という二人のきこりが住んでいました。茂作は熟練の老人でしたが、巳之吉の方はまだ若い見習いでした。

ある冬の日のこと、山へ出て吹雪の中帰れなくなった二人は、近くの小屋で寒さをしのいで寝ることにします。その夜、顔に吹き付ける雪に巳之吉が目覚めますと、恐ろしい目をした白づくめの美しい女が立っていました。巳之吉の隣に寝ていた茂作に女が白い息を吹きかけると、茂作は凍って死んでしまいます。女は巳之吉にも息を吹きかけようと覆いかぶさりますが、しばらく巳之吉を見つめた後、笑みを浮かべ。

「おまえもあの老人のように殺してやろうと思ったけれど、おまえは若くきれいだから、助けてやることにした。でも、今夜のことを誰にも言うてはいけない。誰かに言ったら命はないと思いなさい」。

それから数年して、巳之吉は「お雪」という、ほっそりとした美しい女性と出会います。二人は恋に落ちて結婚、十人の子供をもうけました。お雪はとて

温古知新⑧ 小泉八雲『怪談』雪女

もよくできた妻でしたが、不思議なことに、何年経つても少しも老いることがありません。

ある夜、子供達を寝かしつけたお雪に、巳之吉が。「こうしておまえを見ていると、十八歳の頃にあった不思議な出来事を思い出す。あの日、おまえにそっくりな美しい女に出会った。恐ろしい出来事だったが、あれは夢だったのか、それとも雪女だったのか……」

巳之吉がそう言うと、お雪は突然立ち上り、「そのときおまえが見たのは私だ。私はあのとき、もしこのことを人に話したら殺すと言った。でも、ここで寝ている子供達を見ていると、おまえのことは殺せない。どうか子供達の面倒をよく見ておくれ……」

そういうと、お雪はみるみる溶けて白い霧になり、消えていってしまいました。それ以来お雪の姿を見たものはだれもいません。

このもともとなった伝説は、東京・大久保の家に奉公していた東京都西多摩郡調布村(現在の青梅市中部多摩川沿い)出身の親子から聞いた話であることがわかっています(英語版の序文に明記)。雪女が東京の話とは意外ですが、当時の気候は今とだいぶ違い、冬になると大雪になったのでしょう。

雪女の起源は古く、室町時代末期の連歌師・宗祇法師による『宗祇諸国物語』に、法師が越後国(現・新潟県)に滞在していたときに雪女を見たことと記述があることから、室町時代には既に伝承があったことがわかります。また、各地により雪女の伝説のパターンはさまざまで、八雲の「雪女」のパターンのお話としては、新潟・富山・長野に伝わっています。雪の日には、美しい「雪女」に思いを馳せるのもまた一興!! 各地の伝承と比較してみるのも面白いかもしれせん。(古川久美子)

東京広軌俳句会

代表幹事 佐藤晏行さま

(埼玉県・越谷市)

東京の下町「人形町駅」より徒歩5分、「久松区民会館」にて毎月第4金曜日に開催されている東京広軌俳句会にお邪魔してまいりました。

東京広軌俳句会は、北海道旭川の同人俳誌「広軌」の東京支部が母体となり、滝沢無人氏を代表に昭和63年に発足した会。昨年9月、代表の死去に伴い俳誌は終刊となったものの、本年より新しい「東京広軌俳句会」として、勉強会を続けています。

人形町だけに、人形焼やカナダに旅行してきた方のお土産のお菓子を用意しながら、賑やかに会が始まる。本日は席題「指」を含む4句出句の7句選、うち1句は特選。準備してきた句を清記しながら「いやあこの前、前頭葉を冷蔵庫にぶつけてから俳句がで



▶No.190が追悼号であり終刊号に

きなくなつた」とか、鼻をかみながら5・7・5調で「湧水出たり〜」などと言えば「俳句はそこまで言っちゃだめ、湧水や〜ならまだわかる」「水湧や鼻の先だけ暮残る」という芥川の句もある」等と、大正生まれの落米さんと淑子さんの掛け合いが場を和ませる。佐藤代表の「俳句は作れなくなつても、句会に出ておしゃべりしたり、悪口を言ったり、憎まれ口をたたいたりする事が誠に効果的」という言葉が的を得ていて、思わすうなずく。

それでは、高得点句とそれを選んだ方の講評からー。

6点 ちさき秋バスで行かれる所まで **落米**

秋が深まってしまうと奥までは行かない、そこが小さい秋という感じ／サトウハチローの「小さい秋見つけた」の歌があるので、それだけでイメージが膨らむ。それ+バスですばらしいと思つたが「ちさき秋」の上5が動くかなと思つた／私は逆に「ちさき秋」をテーマに、バスでなく歩いてとか車いすですとか、中7や下5が動くと思つた。すごくいい句というわけではないが穏やか



▶代表の佐藤晏行さま。コメントにも江戸っ子の気風が感じられる。

な好ましい句／では、この句を採らなかつた方の感想として落米さんどうですか？／こういう平易な言葉でまとめようまくいたら幸せでしょうね／はい、この句はどなた？／落米です／何なのよ、幸せって笑)。

6点 伸び伸びと小春を抱いて孤独で **ひろと**

落ちがついてクスツツと笑える／孤独と言っているが、孤独を楽しんでいる感じがする明るい句／自由な身でありながら、その裏腹に孤独があるという句／採らなかつた方の感想は？／軽い変化球をつけて、お上手な句だと思ひます。でも、その変化球が効いているのかいなのか、具体的なものが何もないところも私にはいただけなかつた。／「伸び伸びと小春を抱いて」まで言うて、あと下5に何をいれるか難しいところ。俳句として上等にするなら「孤独なり」でしょうが、「孤独です」と言

い切つたところが孤独なんでしょうね。

5点 大根時く七人の敵とうに失せ **瑠華**

リタイア後、田舎に引つ込んで小さな畑を作つて…と私たちの年代ではよくわかる。ただ中7があまりにも使い慣れたフレーズで楽をしたかな、と／楽しんで稼げりや一番いい、いちやもんつけることではない(笑)／あいつには負けまいとか、あいつより長生きしようとか、でも気付いたらうっかり自分は長生きして7人は亡くなったという気持ち／大根という植物が、友達がいなくなった寂しさを象徴してうまい／「とうに」が気になった。悪くはないが、ここまで自分の感慨を生に言うかな、と。だいたい経っているのなら「七人



▲皆さん充実したいい顔をしていらっしゃいます！

の敵うせにけり大根時く」くらいでどうか。

5点 日に二度笑うときめて冬隣裕子 **晏行**
冬の厳しさが来るが、笑つて暮らそう！という前向きな句／今年もあつとわずか、いろいろ思うこともあるが、私も真似したいと思つた／僕は人間が暗いんだな、笑うと決めたってできないものはできない、決めたけれど笑えないという寂しい気持ちを感じた／同感、厳しい冬が来る前の冬隣だから笑つてないと思う。寒くなる前にハッピーにさあ頑張るぞ、と軽くつつてもいいし、いずれのとり方もできる。

5点 木の実降る遊ば遊ばと通せんぼ **晏行**
メルヘンチックでかわいい句／中7のリフレインが効いてうまい／子ども同士が通せんぼをしている／木の実が降っていると立ち止まって拾いたくなる、それが通せんぼだと解釈した／そ

笑顔礼讃西東



▲句会後も宴席にて「袋回し」と呼ばれる方法で俳句を楽しみ面々

うすると「○○で遊ば遊ばと木の實際
る」となる、どっちつかずで煮え切ら
ない句／(作者)これは、ぼ・ぼ・ぼ、
の韻律の遊びでテクニクです(笑)。
4点 米一合炊く分だけのむかご探
る 紀子
一人暮らしをしている方のつましい
周りの景色が見えていい／炊く分だけ
の、に謙虚な気持ちが出ていい／身の
丈にあつた分だけという優しさ／気持
ちをわかつてほしいあまり「だけの」を
入れてしまいがちだが、それが俳句を
緩くしている。研ぎ澄ませばもつとい
句になる。
4点 そこからは話の長し茸山 淑子
そこからは、つてどこからなんだろう
(笑)。訳がわからなくても茸山をもつ
てきたところがおもしろい／用事はわ
ずか一言二言で終わって、そこからが
長いんだよ、という、さりげない言葉
だけビテクニクがある／この場合は
茸山にはうまくついているが、あまり
多用しない方がいい。

4点 石のせただけの墓ですいわし雲 一恵
それだけで墓になる、というローカ
ルな感じをいただいた／こういうお墓
でも、見守ってくれる優しさを感じた
／誰が言っているのかわからないが、
雰囲気がある。でも何となく純日本
的でいやだな／読む人によって広がり
が出て、ロマンチック。いわし雲が効い
ている／口語調をもう少し引き締めな
いと、情緒に流れてお涙ちようだ的。
4点 日本に生れてライオン冬仕度 幹代
「日本に生れて」が、ことさらにお
もしろい／ユニークなテーマで成功／本
来ならアフリカの大地を駆け巡って
るところ。あたかもライオンが「日本
は寒いからね〜」と思つているように感
じさせるところがいい。
◎席題「指」の高得点句
5点 果たせない指切もあり天の川 淑子
5点 小さき指解けばどんぐりころり 幹代
4点 一枚の紙で指切る冬隣 裕子
■句会中も、句会後も、一つの言葉に
対してポンポンと掛け合いが生まれ、
それぞれのつぶやきが妙に的確で味が
あり、つい笑ってしまう。宴席でもミニ
句会があり、心底俳句が好きなのが
伝わってくる。肩肘張らず、でも「俳句
は詩である」ことを意識しながら、真
剣に俳句と遊んでいる東京広軌の面々。
身近にあつたら、ぜひ入会したいと思
える会なのでした。(木戸敦子)

東葛川柳会 代表 江畑哲男さま (千葉県・我孫子市)

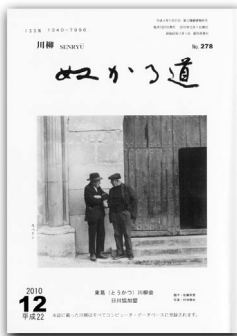
去る10月23日、柏市中央公民館にて
開催された柏市文化祭川柳大会及び
東葛川柳会23周年記念川柳大会にお
邪魔してまいりました。

東葛川柳会は、ベッドタウンである柏
にも川柳会を立ち上げようと、198
7年10月24日今川乱魚氏(本年4月死
去)、窪田和子氏、江畑哲男氏によつて
設立された会で、月刊「ぬかる道」を
発行しています。現代代表の江畑さんは現
役の高校教師。平日の激務に加え、休
日もジュニア川柳の振興や生涯学習の講
師など多忙を極めています。

開口一番、その代表から「東葛に来た
ら何か新しい風を感じてほしい。今日一
日が皆さんにとってリフレッシュできる会
となれば幸い」と元氣なご挨拶。話し方、
声のトーン、人となり、すべてに前向き
な活力がにじみ出ている。

本日は記念大会ということもあり、
千葉県川柳作家連盟会長津田運さんの
ご挨拶、海老原信考さんの「読書の楽し
み」というテーマの講演会へと続く。元高
校の校長先生で日本教育新聞書評委員
でもいらつしやる氏の11ページにわたる
資料とユーモアを交えたお話で、あつと
いう間に90分が過ぎる。その間、舞台裏
では4人の選者による選が盛んに行わ
れている(はず)。本番前の腕慣らし(？)、
恒例の川柳体操の後、いよいよ選が発表
される。

来年6月12日、第35回全日本川柳大
会が開催される仙台からのゲスト選者



▶月刊「ぬかる道」充実した内容、
十村田倫也さん撮影の表紙も秀逸

記念句会

行題

山句×切

▶東葛川柳会 代表 江畑哲男さん



▶千葉県川柳作家連盟会長 津田運さん

行題

山句×切

▶講師の海老原信考さん



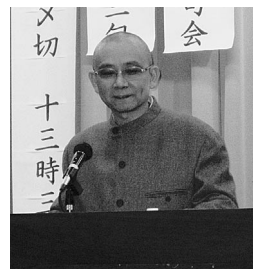
▶恒例の川柳体操



▲「ページ」選者 栗石隆子さん



▲「ほめる」選者 渡辺梢さん



▲「紐」選者 松橋帆波さん

は、川柳宮城野社 栗石隆子さん

「ページ」

◎ユーモア賞

犯人は次のページで待っている

一ページ目から羅漢の日向ぼこ

◎特選

(柏市議長賞)

生還のドラマ三十三ページ

五分粥へ明日のページが見えてきた

来し方のページで光る大家族

川柳研究社 渡辺梢さん

「ほめる」

◎ユーモア賞

仏様こんな弔辞でいいですか

ほめられた男はきつと墮落する

◎特選

ベテランは世辞に衣をつけて言う 幸一

(柏市教育長賞)

天才が生まれる誉めるタイミン

ほめられて駄馬が駿馬の貌になる 光生

川柳マガジニングクラブ東京句会

松橋帆波さん

「紐」

◎ユーモア賞

紐のような下着を妻が付け始め

運のない紐だ処刑のお手伝い

哲男 英雄

◎特選

この紐は首くくるには細すぎる

私だけ紐を下さい仏様

(柏市文化連盟会長賞)

風が見たくて紐にハサミを入れました

代表 江畑哲男さん

「解く」(3句連句)

3句連句とは提出した3句のうち

必ず1句を採る方式で、これは「人は

必ずいいところがあるはず」という性

善説に立っているとのこと。ただ時

に、1句は抜かれるからちよつと手

を抜いて…という方もたまにいと

かないとか(笑)。

◎ユーモア賞

謎解けば逆さまつげがうずき出す

相撲部屋昆布のように干すまわし

◎秀句

誤かい解く為の言葉は丁寧語

束ね髪解けばもうひとりの私

世の乱れ解くのに消費税が要り

正解は黒いお金が知っている

単身を解かれてもまだ母子家庭

人生に解なしという解もある

因習の呪縛が解けぬのし袋

モナリザと妻の微笑が解らない

種明かしされずときめき続いている

夏子 羞策 隆子

宗教という不可思議を追うバズル

新漢字増えてテストがまた楽し

今日民

もう僕を解いて下さいお母さん

恋解禁銀杏並木が燃えている

女心の解析いつも時間切れ

空白が解けて麻酔のミステリー

占いは正解じみたことを言う

帯解くと夜がケラケラ笑い出す

長湯してゆらりゆらりと今日を解く

国訛警戒心がゼロになる

もやもやを拭うセカンドオピニオン

喜久雄 圭子 光生

◎特選

(千葉県川柳作家連盟会長賞)

図書館の書架で見つけた処方箋

好きになる方程式を解いてから

反抗期今すぐ解ける荷ではない

「楽しく学ぶ」がモットーというだ

けあって、130人強の参加者がいて

も壇上と客席の間で軽妙なやりとり

がなされる。

「疑いが解けぬ痴漢じゃないつてば」

／経験あるのは痴漢じゃなくストー

カーじゃない？／あまりやつたこと

はありません(笑)。

「自転地球の軌解きますか」／読

み方はくびきでいいんだよね？／う

ん、よく読めたね(笑)／一応国語の

先生やってますんで。

その後、選ばれた作品の中からさ

らに柏市市長賞等が選ばれ、拍手を

もつて会はお開きに。

■ユーモア、ペース、枯淡、抒情、時事

：時に大笑い、時にしみじみとし、短時

間に様々な感情を疑似体験する。故・

井上ひさしさんの「むずかしいことをや

さしく、やさしいことをふかく、ふかい

ことをおもしろく、おもしろいことをま

じめに、まじめなことをゆかいに、ゆか

いなことはあくまでもゆかいに」の言葉

が、まさに当てはまる会だと感じた。

「常に新鮮な風を入れる窓でありたい」

とおっしゃっていた江畑代表。選に入った

方ももれた方も、皆さん一様にサツパ

リした表情で会場を後にしていた姿が、

本大会の成功を物語っていました。

(木戸敦子)



笑顔礼讃西東

花柳雪舟さま

(東京都・世田谷区)

本年6月「川柳エッセイ集 ゆきふね」を出版され、日舞花柳流のお師匠さんでもいらつしやる花柳雪舟さんを北沢のお宅に尋ね、お話を聞きしました。



▲写真は人の苦手ということで日舞「北州千歳漕」の写真

■川柳を始めて長いのですか？

書くことは昔から好きでしたが、川柳は十代の後半に、新聞で「タラップは猫も杓子も片手上げ」の句を見て、その穿ちとユーモアに惹きつけられたのが最初の出会いです。ただ、実際は読むだけで、句を作るようになったのは平成に入ってから。たまたま新聞に投稿したら選に入り、活字になる喜びに気をよくし学ぶ意欲が沸々と(笑)。故・川田柳光先生に師事し、東京みなと傘川柳会に入会しました。

■句集出版は？

6年前位に先生から本にまとめることを勧められたのですが、母の介護もあり断念。その後、母が亡くなり、子どももいないので一人ぼっちに。20代から教えている日舞も結局は残るものではないので、何かを残したくなっ

たのです。そんな時に御社のパンフレットを見て、やろう！と即決したのが2月。それから18年間で作った約7千句から千句を選び、また削つての繰り返し。そんな最中、3月に病魔に襲われ入院を余儀なくされました。でも、入院までの3週間のうちにやり終えてしまおうと、選句を済ませ、新たにエッセイを3つ書き下ろしました。

■大変じゃなかったですか？

日舞では、辛いことも一杯ありました。プロは苦しんでも、趣味は楽しむもの。病気も時間も忘れ夢中でまよめました。走りだすと止まらないタイプなんです。だから、後で一晩考えればよかったと後悔することもありますが、今回の出版は、いい本ができてズバリ後悔なし。日舞のお仲間を中心に本を差し上げたら、手紙やお祝いやらでうれしい悲鳴。3、40年ぶりに会いたいという方もいらして、面接みたいに1週間に1人ずつ家にお呼びしては楽しい話に花を咲かせました。皆さん踊りしか能がないと思っていだらしくびつくり(笑)。

■エッセイも秀逸でした。特に「渋谷文化村」の話は…

わが故郷は、千代田区4番町で勤め先は銀座。都会育ちのため、昔か

ら村の風景に憧れを抱き、渋谷に村が建設されるというニュースに心躍らせてその日を待ちました。村ですからあまりおしゃれをしていくのもどうかと思案しつつ、近代的なビルの中へ…。中に入れば村になっていたのだろうと思っ

■川柳やエッセイの他にも？

とにか「書く」ということが好き。野球も好きで、ヤクルトのことを考えると胸がどきどきする(笑)。TV中継を見ながら、今日の先発は誰、中継ぎは誰…とノートにつけています。他にも朝昼晩、食べたものは30年来欠かさず記録しています。ご飯を食べたらお茶を飲むのと同じ感覚で、食べた

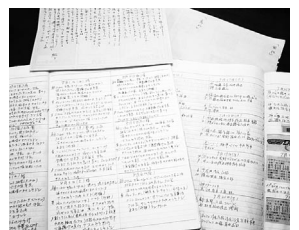
ら書く。母がいた頃は、母の分も書いていました。

■お母様とはずっと一緒で？

4人姉妹の二女ですが、他は嫁いだので母とは二人三脚、運命共同体でした。晩年、施設には入りたくないという母に、1年365日1095食、毎食作って食べさせていました。やることはやったから、悔いはありません。今にしてみればその大変さが懐かしい。寂しい反面、ホッとする部分もあります。今はどこに行こうと何をしようかと、誰に会おうと気にすることもなく幸せです。



▲自宅にある舞台



▲ピシッと書かれた食べ物と野球の試合結果等の記録

■これからは？

子育ても経験していないし偏っている部分もあるかもしれないので、どんな話を持ちかけられても大丈夫なように、あらゆる部分に精通したいと本を読んだりニュースを聞いたり、切り口を多く持てるよう努力しています。川柳と踊りをお供に、穏やかに、このままの生活を続けられたらいいですね。きつと、思ったことは即やり、言いたいことは言いがらなだと思えます(笑)。

駅前のティッシュ借金しろという母介護これが幸せかとおもう共にした歳月悲しみの深さ男見る目がありすぎてまだ一人終章に隠しておいた爪を研ぐ

★句集のお手伝いをしている際、校正をお出しすると退院後にもかかわらず、すぐに返送され「次はまだこないの？」と催促される始末。何事にも猪突猛進。一時はある歌手に熱を上げ、着物の裏地にサインしてもらったという逸話も。正直で、一所懸命で、喜怒哀楽をしまっておけなくて。「エチオピアは歳が幾つでも関係ないそうよ。私はエチオピア流でいくの」と、しっかりと雪舟流でした。(木戸敦子)

投稿作品

※今月も、沢山のすばらしい作品を投稿していただきました。今後も、みなさまの投稿をお待ちしております。
次回掲載分は1月14日(金)締切です。

俳句

- 1 在りし日の鉾山やまの名残りの蔦紅葉
千葉ますみ(宮城県)
- 2 慰霊船追ひてよすがら夜光虫
山東爺(北海道)
- 3 栗ごはんふたりの暮しかみしめる
井田由利子(宮城県)
- 4 三島の忌グラスにひびく氷音
松涛千鶴子(東京都)
- 5 病みて知る人のやさしさ愛の羽根
吉村筑紫(埼玉県)
- 6 利根川の風の吹き立つ穂草かな
松嶋光秋(東京都)
- 7 連れ添ふも半歩遅れて秋裕
有坂馨園(福島県)
- 8 晩秋や木の葉に思念風揺する
井口桂山(新潟県)
- 9 小鳥来る山河のなげき顯なり
新井竜才(埼玉県)
- 10 千灯会祖母と手合わす浴衣の子
山田幸代(兵庫県)

- 11 修正のきかぬ暮しや花茗荷
早乙女文子(埼玉県)
- 12 地獄よりエスペランサとちちろ鳴く
小島岳青(新潟県)
- 13 日があつて地蔵びよりや芒原
美濃部紘三(新潟県)
- 14 減反の故郷さとより届く今年米
堅田秀子(東京都)
- 15 地底より生還果し天高し
井原毬子(東京都)
- 16 白菊やどんな風にも生きられる
副島加代子(宮城県)
- 17 姪若き痛みに耐えて過こす秋
佐藤佑子(福島県)
- 18 ともづなを短く繋ぐ夕野分
平山千江(岩手県)
- 19 つややかに新米白ひ今朝の膳
原田かずゑ(千葉県)
- 20 八十路なを变らぬ月見も団子
谷川利子(愛知県)
- 21 秋冷の風が研ぎ出す里のきら
乾久子(滋賀県)
- 22 笛の舌酒で湿して秋祭
野木宗信(奈良県)
- 23 耳掛の手がものを言ふ朝の市
寺岡文生(静岡県)
- 24 ティータイム栗をのせたるモンブラン
檜山とり子(東京都)
- 25 しぐるるや東京の坂江戸の坂
根岸五郎(千葉県)
- 26 三年日記買ひ求めたり杖の先
井上幸男(東京都)
- 27 粕汁や小さな顔をほろ酔はす
千代田栄次(東京都)
- 28 威さんと熊礫に茸狩る
関谷秀二(愛知県)
- 29 背高き乙女の顔で紫苑咲く
高橋邦子(高知県)

- 30 夜叉に又龍絡みつく雪女郎
浦橋渴雪(兵庫県)
- 31 草笛や淋しき時はよくひびき
佐野和彦(静岡県)
- 32 曼珠沙華女の情念立ち燃ゆる
佐野しづ子(愛知県)
- 33 峻険を降りて花野の風となる
澤雅子(大阪府)
- 34 蛭ヶ島夫婦で仰ぐ小春富士
炭崎博(滋賀県)
- 35 残されて媪一人の次郎柿
三ツ木宗一(東京都)
- 36 行く秋や一語一語と舞ふ木の葉
野中信夫(東京都)
- 37 ふるさとが鍋から溢るのっぺい汁
長峰正晴(千葉県)
- 38 地方紙に包まれて大長茄子5、6本
星一子(神奈川県)
- 39 充分にをんな林檎の丸囀り
鈴木岑夫(千葉県)
- 40 秋刀魚焼く負けず二匹が煙吐く
西村けい(茨城県)
- 41 山脈やまなみの奥も山脈柿吊るす
渡辺嘉幸(東京都)
- 42 鯛雲地の果て迄も歩きたし
竹本美美子(新潟県)
- 43 野分立つひさしの遺作負りぬ
富樫和子(山形県)
- 44 信楽の狸目をむく残暑かな
小西四郎(東京都)
- 45 名月や喜怒哀楽の世を和する
村木尚(新潟県)
- 46 幸せは中の中でのよし冬麗
大橋恒次(新潟県)
- 47 赤い羽根つけない胸や拒食症
森白樹(東京都)
- 48 女体図の瞳に見らる冬茶房
津田忠彦(岡山県)

- 49 うねくねと海風きたり芒かな
福田和子(東京都)
- 50 ネジのない時計となつて軽くなり
暉峻康瑞(鹿児島県)
- 51 古い深く百姓やめてはや五年
中嶋清子(佐賀県)
- 52 鈴蘭は幸福を呼び可憐なり
五味田幸夫(神奈川県)
- 53 鳥籠のさえづり長し秋惜む
三津木俊幸(千葉県)
- 54 野の花を壺にうつして汀女の忌
佐瀬千エ子(神奈川県)
- 55 産土の空高々と雁渡る
大場きよし(宮城県)
- 56 往き交ひの人にも会釈七五三
田中昶(鳥取県)
- 57 頼もしく見える腕白七五三
北村純一(神奈川県)
- 58 湯屋までの長き回廊初紅葉
清水喜代子(岡山県)
- 59 萩少し持ち上げて蔵への小道
小林七重(新潟県)
- 60 鐘の音までも濡らして秋つり
安部勝衛(岩手県)
- 61 彼岸花燃える畦道婆ひとり
忍正志(兵庫県)
- 62 たをやかにコスモス揺るる恋に似ず
川崎洋吉(福岡県)
- 63 伝言の重さつめたさ柳散る
阿部静子(北海道)
- 64 晩秋に紅葉ゆれる山野かな
楠本玲幸(大阪府)
- 65 編集の机上を整理年用意
園部佳成(岐阜県)
- 66 新涼の通院バスに乗らず行く
藤沢樹村(東京都)
- 67 杖ついでおのれ勵ます冬田徑
伊藤修敬(三重県)

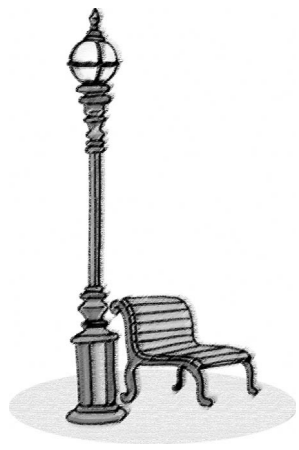
- 68 ヒロシマ忌鳩が水飲む爆心地
菊池シユン(青森県)
- 69 筆運び静かに便り書く良夜
森ふく(千葉県)
- 70 傘寿過ぎ米寿へ一歩走り蕎麦
西口東治(大阪府)
- 71 小菜間引く吾も生涯小市民
今井岩夫(千葉県)
- 72 鳥渡る一本の道選びけり
浜田蛙城(静岡県)
- 73 チヨッキリも地球の仲間秋暑し
林多み子(群馬県)
- 74 遠筑波まで澄みわたる刈田かな
浅倉里水(千葉県)
- 75 散る紅葉もう帰れない水子あり
杉本敬治(愛知県)
- 76 い弥彦の九塔山を眠らせず
大竹憲弥(新潟県)
- 77 鯛雲五感に眠る一編詩
小野寺裕子(宮城県)
- 78 金網の中は青芝軍事基地
鈴木与平(宮城県)
- 79 夕焼を残して列車東へと
神作洸江(埼玉県)
- 80 大阿賀のからくれなゐに夕紅葉
今井勝子(新潟県)
- 81 木犀や御苑香し雲高し
矢野絹枝(東京都)
- 82 大枝を転がしているチエーンソ
木下精(大阪府)
- 83 満月に終の住処を照らしけり
村上千代(大阪府)
- 84 緑蔭に鳥の目光る柿田川
清水怜一(神奈川県)
- 85 三代を守り通して菊の鉢
早矢仕邦夫(愛知県)
- 86 仕舞湯の母の鼻歌里の秋
大久保アヤ子(東京都)
- 87 昼寝猫紐をほどいて抜けて来て
居原田連星(大阪府)
- 88 そげですね共に歩みし今日の月
野村牟人(東京都)
- 89 上り窯火入れの日まで虫の宿
山本直子(大阪府)
- 90 稲孫田の人影もなく風青し
清まさじ(静岡県)
- 91 頭時計は猛暑のままの神無月
佐伯セツ子(香川県)
- 92 夏草の土の匂ひを耕せり
佐野幸平(静岡県)
- 93 コスモスやケータイ指南は十二才
佐藤正子(福島県)
- 94 夫の忌や秋明菊の匂ふ庭
芋木匡子(滋賀県)
- 95 十二月八日騙る高ぶる日でした
福岡悟(東京都)
- 96 紅葉の山城に来て人想う
須澤重雄(長野県)
- 97 人生の華先町は塵まかれる
浅沼洋子(神奈川県)
- 98 秋の燈に仕様書繰るや電子辞書
高野春枝(埼玉県)
- 99 露地行けば人声のなし秋の風
油谷郷史(兵庫県)
- 100 深む秋曲り家隈の火なきくど
杉村美保子(岩手県)
- 101 お点前は何流ですか万年青の実
湯浅芳郎(岡山県)
- 102 干大根ウエスト辺りを括られて
布目雅之(埼玉県)
- 103 手の平や色なき風の恋心
安木沢修風(新潟県)
- 104 大漁の旗なびかせて鯛雲
西村幸子(滋賀県)
- 105 陽の落葉水車まわして豆腐茶屋
須田洋子(埼玉県)
- 106 橋立を跨いで眺む白い秋
井上静夫(栃木県)
- 107 秋風や高野に数ふ無縁臺
木田亜津子(神奈川県)
- 108 掃き惜しむ金木犀の下にきて
堀木和子(大阪府)
- 109 流星や明日は遠くへ帰る子と
勢川直美(大阪府)
- 110 遠山に夕陽を残し下り鮎
川口襄(埼玉県)
- 111 何事も瑞兆と見し初御空
阿部澄江(宮城県)
- 112 秋草や野辺を彩る水彩画
藤田君江(東京都)
- 113 づかづかと三脚の入る草紅葉
竹内ハヤ子(埼玉県)
- 114 ごはんとふうまさのひびき豊の秋
内河邦久(東京都)
- 115 さるすべり花に実を変え益休み
木村俊彦(奈良県)
- 116 はや師走父の齢に並びをり
中野豊彦(東京都)
- 117 黄落やみんな詩人になって幕
萬濃その子(千葉県)
- 118 穂芒の揺れて歳月遠くなる
棚橋麗未(東京都)
- 119 饒舌はリップサービス焚火の輪
紺谷睡花(東京都)
- 120 お終ひに取りおく鼠火花かな
秋谷静子(茨城県)
- 121 熟れ柿の落ちて気づく忘れもの
宇田川正雄(埼玉県)
- 122 オリオンの見果てぬ夢や明日もまた
齊藤安弘(神奈川県)
- 123 秋晴れの空に應へる瀬音かな
山岸伊久雄(東京都)
- 124 リホームし小家に夫と冬迎う
村松知津子(大阪府)
- 125 歩くたび紅葉且つ散る別れかな
椋本望生(大阪府)
- 126 ひと雨に深むる味の秋茄子
駒場京子(神奈川県)
- 127 目まといの来る天道を測るかな
諏訪杜夫(埼玉県)
- 128 山間の村のなぞへの帰り花
高橋透(兵庫県)
- 129 夜は虫のものよたつぷりサラダかな
竹澤茂子(大阪府)
- 130 生まれても白うまれてもいわし雲
村上幸枝(山口県)
- 131 星月夜ゴツホ描きし世界めき
北嶋八重(京都府)
- 132 黒揚羽高くは翔はず桜桃忌
廣瀬喜代子(岡山県)
- 133 野地蔵の肩を直撃熟柿落つ
延原令岱(岡山県)
- 134 紅い茎絡んでゆれる蕎麦の花
中目サヨ子(鹿児島県)
- 135 石狩川流れも瘦せて枯尾花
堀田寿美子(北海道)
- 136 だるま絵で暑さの見舞い呉れし人
平賀田鶴子(愛知県)
- 137 除夜の鐘喜怒哀楽の響きかな
橋本世紀男(東京都)
- 138 体調は中くらあなり敬老日
増田信雄(埼玉県)
- 139 落葉添え心豊かになる手紙
柳澤京子(宮城県)
- 140 一匹の虫も鳴き出す文化の日
五十嵐勝敏(新潟県)
- 141 障子貼る小さき母の大仕事
高松ゆか(神奈川県)
- 142 里山に錦の絵なく竹騒ぐ
早川述史(愛知県)
- 143 人生は宿題多し夜長の灯
仁科美代子(長野県)

- 144 恋を語る五十路の女吾亦紅
坪田勝秀(鹿児島県)
- 145 次々に骨壺になる冬の薔薇
原田麦吹(埼玉県)
- 146 生くるとは明日を待つこと秋の星
中野博夫(埼玉県)
- 147 気にそまぬ事は忘れて毛糸編む
小林紀美子(東京都)
- 148 枝に跳ね枝にぶつかり木の実落つ
津布久信雄(東京都)
- 149 花のなき鉢に雨降る秋の暮
仁藤ひろじ(埼玉県)
- 150 杳き日の思ひに浸り麦の秋
青木ケン子(埼玉県)
- 151 山の路足元に散る赤朽葉
中村和弘(愛知県)
- 152 振りむかすやうなオーラの返り花
羽根田明(神奈川県)
- 153 万物を照らし照らさず良夜かな
岩村昇(神奈川県)
- 154 しなやかに風に遊ばすスキかな
阿部幸子(宮城県)
- 155 南北に長き列島雪蛭
高杉杜詩花(北海道)
- 156 まほろばの宿の暮色や秋深む
三浦八千代(千葉県)
- 157 受けし手に神の雫の露の玉
岩永登茂子(大阪府)
- 158 説法の日蓮像に小鳥来る
大阿久雅子(東京都)
- 159 天地の恵みに満ちし里の秋
柴田恵美子(北海道)
- 160 しぐるるやどの山となく出羽三山
佐藤茂三郎(千葉県)
- 161 走り蕎麦煉けし梁に蓑と笠
西川孝子(奈良県)
- 162 秋陽満つ骨拾う箸は長すぎる
辻升人(東京都)
- 163 あけび実は届かずじまい空にあり
北野耕兵(千葉県)
- 164 老屈の己半熟柿熟す
藤井春三(埼玉県)
- 165 新米やお替りと云う声しきり
岡村君枝(茨城県)
- 166 赤潮の膝まで迫る夏帽子
小山たけし(埼玉県)
- 167 手水舎の作法教えて七五三
神一男(静岡県)
- 168 秋暑し傘寿の夫のどぼとけ
堀井和(神奈川県)
- 169 定位置にははの椅子おき後の月
大下志峰(福井県)
- 170 大空の一つ輪描く渡り鳥
菅井文男(新潟県)
- 171 花芒日々晩年と思ふべし
尾崎良雄(三重県)
- 172 勅願の森の深きに鳴く梟
佐々木トモ(宮城県)
- 173 晩鐘の響きに峡の稲実る
長尾俊彦(香川県)
- 174 納骨のすみて身にいる曼珠沙華
橋本まこと(栃木県)
- 175 茶の花や東西南北日本晴れ
堀井酔人(茨城県)
- 176 精一杯生き来し余生秋惜しむ
田島星景子(宮城県)
- 177 八十の己あたたむ月見酒
二ノ宮利江(東京都)
- 178 おお寺の八一の歌碑や秋の月
池本勇(大阪府)
- 179 月天心雲を掠めて流れゆく
上谷すみゑ(神奈川県)
- 180 昼席へ妻を連れ出し文化の日
古谷力(東京都)
- 181 風ありて影絵のごとき障子越し
丸山道子(新潟県)
- 182 鋤焼やしらたきからむねぎの味
野中よしみ(神奈川県)
- 183 花八ツ手百姓ことば浮いてくる
米山光郎(山梨県)
- 184 駿河から相模へ延びて鯛雲
伊藤みさ(静岡県)
- 185 晩年の駆け足にも似て黄落す
池田岬(埼玉県)
- 186 顔見世の河原舞台や赤とんぼ
植野無人(兵庫県)
- 187 冬銀河してやれざりしこと幾つ
能條憲夫(神奈川県)
- 188 衣ずれのやうな水音柳散る
岡深也(神奈川県)
- 189 紅葉の山の名知らねど思ひ出は
吉野成行(愛知県)
- 190 小春日や待構へたる庭いぢり
野原香雪(北海道)
- 191 小春日やあのサルに名をほしゅう
ちゅう
杉浦俊雄(静岡県)
- 192 稲熟るる田人の名札煌めきて
中山日出子(大阪府)
- 193 家の前家主と共に紅葉かな
秦幸子(福岡県)
- 194 冬瓜の炊き上ぐ色のとろり透け
大藪新子(大阪府)
- 195 冬うらら昨の惑ひは何ならむ
斉藤たかこ(茨城県)
- 196 地下街に空をみている吾亦紅
山崎鶴恵(鹿児島県)
- 197 をみな抱く様に縄掛け雪囲
本間七窪子(山形県)
- 198 自販機や沈黙破り天高し
長野操(埼玉県)
- 199 木枯や行方決まらず渦となる
篠原三郎(静岡県)
- 200 毀れやすきころの集ふ雪蛭
寺尾亜真李(新潟県)
- 201 天高く見上げる紅葉空を染め
針生清(千葉県)
- 202 ほろ酔はば鬼女ともならむ紅葉狩
増本和子(千葉県)
- 203 糶生え天へ階なす能登棚田
吉澤昌美(長野県)
- 204 物の無き世に生き柿の甘さかな
檜山克子(埼玉県)
- 205 足しげく通ふ介護や去年今年
森崎榮久(岡山県)
- 206 うちつけに母の面影返り花
大谷茂(埼玉県)
- 207 山里に霧は動かず白寿逝く
吉村充治(埼玉県)
- 208 フラッシュのごとき朝日で紅葉狩り
石川郁子(埼玉県)
- 209 秋高しママと呼ぶ声走り抜け
田野井一夫(栃木県)
- 210 木の葉髪梳けば寂しき黄揚の櫛
重原昇(新潟県)
- 211 縁談を断わりにゆく紅葉坂
若林卓宣(三重県)
- 212 師走入りスマイルムーンきらり星
長谷部喜代子(大阪府)
- 213 乗り来たる船すでに発ち秋時雨
梶鴻風(北海道)
- 214 反則の切符きらるる炎天下
馬場綾子(新潟県)
- 215 もみじ狩り黄砂けむりて足早く
岸田晴代(奈良県)
- 216 しぐれ雲捉へるほどにツリー伸び
行方素芳(東京都)
- 217 一雨に猛暑崩る、けさの秋
鏡たか子(山形県)
- 218 墨流となりて暮れるし秋の川
安藤まこと(岩手県)

短歌



- 220 吾娘の手を引きお色直しに下がりゆく夫もスポットライトの中に
直江秋子(新潟県)
- 221 荒川の土手に人生奪われし佐藤の友に我が身を詫びて
五十嵐睦博(新潟県)
- 222 寒月を仰ぎて思ふ献体せし義姉の御葬りは何時頃なりや
木暮珣子(群馬県)
- 223 取りおきし粗悪な貨幣にしみつし戦中戦後の昭和のにはふ
黒澤正行(福島県)
- 224 文化祭「声」に出して読みたい日本語から演出しました
藤原昭三(滋賀県)
- 225 日本のテレビをみたら日本がどういう国かすべてわかったわ
梅澤鳳舞(埼玉県)
- 226 つとめ終え家へ急ぎし母の背を優しく送るひまわりの花
若月理依子(新潟県)
- 227 あきつ舞う空の恋しや老いてなを舞う日いつ来る待つ日ひたすら
星野三興(新潟県)
- 228 江の電の走るあたりに渋滞しバスは宵すぎ甲府につけり
土屋喜雄(山梨県)
- 229 今年また散策ラリーも近づきて夜の町なかのぼり立てする
高須孝(愛知県)
- 230 自費出版せしわが本の感想を短歌に托して友より届く
田邊美代子(三重県)
- 231 鷗が紙のごとくに降りてきてわれの水葬あざやくなりや
北岡晃(兵庫県)
- 232 わが病めば「とんで行くから」と言いくるる君の心に支えられる
櫻井文子(東京都)
- 233 天つ風今は亡き人穏やかに家族のその後いつも見守り
大橋絵代(千葉県)
- 234 典子・則子・節子・千代・悦子など昭和三年ご大典生れの名
佐々木都(長野県)
- 235 電話さへ扱へなくて昭和者置き去られたる悲感や強き
鈴木清美(愛知県)
- 236 除夜の鐘妻と聞きつつ振り返るこの一年の喜憂の思い出
濱田イサオ(福岡県)
- 237 金木屋の香は何処までも伝はるか駅までの真直の細道
久保和友(滋賀県)
- 238 七不思議桜に松の共棲ロマン生を競ひてわれら夫婦も
西山悌三郎(高知県)
- 239 秋あかね何を思うか羽やすめ目いっぱいの夕日を入れて
田村淳子(新潟県)
- 240 朱夏ならば君の賜ひし扇もて赤き月影あふぎ見るかな
百花清(埼玉県)
- 241 胸底に赤き漣あり沈めたる思想はわれの聖域なりき
寒川靖子(香川県)
- 242 ガラス戸に孫の手形が残りをり庭に百合の花ゆれて咲きいる
小島秀雄(福島県)
- 243 弟よブラジル移民幾星霜逢えずがまに歳月無念
山本敏順(長野県)
- 244 CDの銀の円盤揺れひかる案山子も立ちて実る稲穂田
桑原謙一(群馬県)
- 245 秩父路にも秋はきざしぬひめやかに鮎釜飯にかほり立つ風
千木良宣行(埼玉県)



- 246 認知度と視力感度と検査され後期高齢免許更新
田中豊恵(新潟県)
- 247 球根の時期を逸せるクンシラン二世のランの芽生えかな
佐野澄江(山梨県)
- 248 木犀の甘ひ香りのただよえる庭に出ずれば命ながらふ小暮昭司(群馬県)
- 249 癒えぬこと知りての看取り五月雨るプライド高き兄の面なし
磯部力(新潟県)
- 250 半身を土中に埋めし捨て墓を守るがごとく捨て子花咲く
渋谷清(埼玉県)
- 251 中国とは与するなかれ静まれる尖閣諸島に逆波を立つ
椎忠夫(神奈川県)
- 252 財ひとつ成さず黄泉へ発ち逝くを我が人生に悔い一つ無し
佐藤古城(埼玉県)
- 253 恥多き後悔多き来し方をつくづく思ふ秋の夕ぐれ
春口蓮男(静岡県)
- 254 薄覚めの凍夜に残る感觸八隣の寝息さえ騙されし残骸二
濱田深雪(新潟県)
- 255 十日夜ワラ鉄砲の音はせず移り行く世の隅吾れも生き
村岡盛英(群馬県)
- 256 大和路に桜紅葉の季節来て今年も正倉宝物に逢う
岩崎令子(大阪府)

川柳



- 257 火傷せぬ距離でステップ踏むワルツ
桑原清風(群馬県)
- 258 顔忘れた人から年賀状届く
大江秋月(兵庫県)
- 259 ワンテンポ遅いシニアの口喧嘩
夏井誠治(新潟県)
- 260 淡島は村上市では有りません
大川聡(新潟県)
- 261 鉄の綱地獄の杭夫みな吊るす
青木日出男(群馬県)
- 262 サングラスかけて粹がる二十三
原田英一(千葉県)
- 263 初参賀防弾ガラス屹立す
小俣英之助(大阪府)
- 264 八十路こえ親が子になり子が親に
河合ヤスエ(大阪府)
- 265 あきらめた茄子に雨降り息を吹く
鈴木義雄(福島県)
- 266 閑居してまだ反骨の血が騒ぐ
藤沢健二(千葉県)
- 267 人恋し秋には秋の風を聞く
勢藤隆(群馬県)
- 268 しくじった所ばかりをほめられる
岡本恵(茨城県)
- 269 煙自然に天のふところ
奈倉楽甫(愛知県)
- 270 失敗よそれがどうした明日がある
高柳閑雲(愛知県)
- 271 老農がコスモス見てる休耕田
石原学(群馬県)
- 272 お誘いの電話嬉しい花をかう
近藤はつみ(福岡県)
- 273 戸を閉める音も気遣う老い暮らし
守屋高雄(岩手県)
- 274 アンチエイジング老化は罪ですか
黒田るみ子(徳島県)

- 275 平成の年貢米です税保険
中林恵子(大阪府)
- 276 もやもやが吹っ飛ばし思い化学賞
野田明夢(新潟県)
- 277 どの色も好きで染まらぬことにする
田澤宏(新潟県)
- 278 感情は真心覗く人の顔
松田義登(福岡県)
- 279 里山で競う桃栗柿みかん
藤井碩子(山口県)
- 280 熱爛が女の依怙地溶かし出す
森本遊笑(兵庫県)
- 281 黒い画面のテレビを知った平和賞
久本にい地(岡山県)
- 282 被爆者のもう時間ない生の声
小山恵美子(大阪府)
- 283 ヨン様が好きなき妻いて平和です
中嶋秀次郎(埼玉県)
- 284 気遣いも気兼ねもいらぬ土が友
大岩歌子(岡山県)
- 285 更衣して遊び出す群雀
老沼正一(千葉県)
- 286 米値下げへこたれんぞと農に出る
工藤昌見(山形県)
- 287 歌謡曲良さというより懐かしさ
藤沢今日民(千葉県)
- 288 人間のモードを変えろにじり口
中島久光(岩手県)
- 289 事の善し悪しを尺貫法で見ろ
丸山芳夫(東京都)
- 290 よみがえる留守電の声しぐさまで
奥那於子(大阪府)
- 291 私にはまだ夢があり逆と富士
松田重信(埼玉県)
- 292 修身が欲しい世相が荒れている
山崎一嘉(愛媛県)

10月号の
心に残った作品

「投稿作品で心に残ったものは？」の問いにたくさんのお返をお寄せ頂きありがとうございます！

その中で特に多くの評価を集めた作品と、それを選んだ理由の一部をご紹介します。

《大賞》
5 草むしり孤独の中にある自由

中野勝子(鹿児島県)

・遠き日の思い出がよみがえりなつかしく思いました 櫻井文子(東京都)・孤独の中)とても良い言葉と思えました 近藤はつみ(福岡県)・作者の心境を卒直に書いている 菊池シユン(青森県)・日影の自由を楽しむ事 野村牟人(東京都)・人に干渉されず自由と云う広がりがあったとてもよい!! 柳澤京子(宮城県)お忙しい毎日の中で草むしりも大変な作業です。その中で少しあわせな自分をまだ見ぬ遠い南国へ思いを馳せました 池田岬(埼玉県)他

【自句自解】

梅雨があがると、鹿児島では畑の雑草が、一斉に伸び出します。だからからも指図されず一人で一日中もくもくと草を抜く、一人で働く孤独だろうと思われ、心の中は自

由です。一人づつ本当にいいものです。抜いた草の山をみて達成感も味わえます。「自由とはひとり無心の草むしり」の方が、素直な句になるのかもしれない。

《俳句》

10 兄の屍まだ海の中敗戦忌

吉村筑紫(埼玉県)

・英霊を思う心が胸にしむ。平和を祈りたいです 土屋喜雄(山梨県)・小生初めての映画「愛染かつら」に連れて行ってくれた十才違いの兄、日中戦争の戦地に向う途中済州島沖で戦死。果して海底に骨有るや否や六十六年も前のこと 大橋恒次(新潟県)・戦争が終わって六五年にもなっても兄の屍が海の中、戦争は絶対に繰り返してはならない。九条を守りましょう 鈴木与平(宮城県)・戦争の悲惨さがよく現されています 須田洋子(埼玉県)・海軍の兵だった兄の死、未だに癒えない痛恨と哀悼の思いが胸を打つ 尾崎良雄(三重県)他

24 百才の母の黙禱終戦忌

佐瀬子工子(神奈川県)

・百才のお母さんの黙禱に戦争への深い思いを感じました 富樫和子(山形県)・終戦忌：戦争を経験した者には黙禱の外に語るべき言葉はない。唯黙禱に思いこめるだけ 伊藤修敬(三重県)・百才のお母様何をお祈りしたのでしよう。万感胸に迫ります 秋谷静子(茨城県)・百才になられても頭も心もしっかりされている、御母堂を詠まれた句。八十四才の私もそうありたいと思います 村松知津子(大阪府)・長き世を生きてこられたお母様の胸には様々な想いが迫ることでしょう。平和への願いも 北嶋八重(京都府)・百歳の母の戦争への思いの深さが伝わってきた 小山たけし(埼玉県)他

《短歌》

225 ふるさとの兄より届く秋の荷の藁縄 切らずにいねいに解く 藤原昭三

・私も田舎の兄からたまに荷が届くことありますが、この歌の通り、丁寧に解きます。とてもカッターナイフでなど切れません 鈴木岑夫(千葉県)・実家の兄から「秋の荷」が届く。ふるさとでは藁縄とて大事に使うもの。兄を思いつつそれをほどこく弟、しみじみとした兄弟愛 百花清(埼玉県)・兄に感謝の思いを込めながら 山本敏順(長野県)・荷の中は兄さんの丹精のものがいっぱい。結えた縄にも心づくしが伝わる兄弟愛にうたれる 池本勇(大阪府)・曾ての家族愛を目の辺り見せて呉れた秀歌である 佐藤古城(埼玉県)他

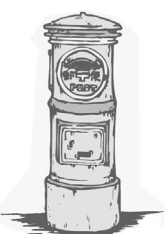
《川柳》

259 オブラート一枚分の嘘でした

黒田るみ子(徳島県)

・ウソの多いこの世の中でユーモアのあるウソも面白い。川柳的な面白さに感服 夏井誠治(新潟県)・きつとやさしい嘘なのでしよう。物語を感じさせます 岡本恵(茨城県)・「オブラート一枚分」が面白い。ウソと判っているのに、その一寸したゴマカシなかなか言えませぬ 忍正志(兵庫県)・ユニークで切り込まない優しさがにじんている 藤井碩子(山口県)・日常生活の裡で的確にとらえている心の驍 松田重信(埼玉県)他


※今後もふるってご投稿をお願いいたします!



前回のアンケート

★ Q. 記憶にある一番最初のクリスマス？

★ みなさまの回答を見ているだけで、楽しくなっています。



昭和二十年造材山の宿舎でロケットの火で聖歌を聞いた 山東翁／父が大きなケーキを買って帰り、そのおいしかった事 井田由利子／三ロツツの公演に行った時、盛んにクリスマスソングを吹いていた 五十嵐睦博／昭和22年12月のイブ。解放された若者達がオールナイトで飲み、歌い、どんちゃん騒ぎ。翌朝の新聞にその写真が載りショックを受けた 木暮珣子／サンタが煙突から入ってくると思っていた 吉村筑紫／クリスマスパーティーでダンスを踊ったこと 松嶋光秋／約50年前、長女が3才の頃、裏の山からヒバの木を切ってきてツリーを飾った 黒澤正行／S28、高1、教会でのイヴ、オール英会話に戸惑うも日本を離れた深い印象 有坂馨園／父、母が枕元にプレゼントを置いてくれ朝が楽しみだった 山田幸代／アメリカに占領されていた昭和25年初めてケーキを買った 藤原昭三／小学5年生の時両親が兄弟にファスナーの筆箱をプレゼント 梅澤鳳舞／小3時の日曜学校のそれ。寒い北の街のことであった 小島岳青／70年以上前のこと、正月用の「栗、干し柿、ミカン」をクリスマスの夜きれいな紙袋に入れて枕許に置いてもらった 相馬竹浪／小学1年生のクリスマス。妹が生まれ、母が不在の雪の日の景色 若月理依子／普段食べたことのない、甘い物を食べた記憶 美濃部絃三／子供が4、5才位の時、少ない家計費からクリスマスツリーを買い主人と二人で祝った若い日の記憶 井原毬子／昭和10年小学校2年生の時、横浜の伯母の宅に宿泊しイギリスから帰

国した伯父を囲んでクリスマス会を祝い、イギリス銀貨をもらった 青木日出男／終戦後近くの教会でピカピカ光る鉛を3ヶ頂き、あまく美味しかった思い出 佐藤佑子／しんしんと降るホワイトクリスマスに感動 稲葉民雄／小学生の頃手作りのクリスマスツリー、雉子の丸焼き 平山千江／戦後、戦場のコーラスサークルで上野、池の端で楽しく集った 原田かずゑ／終戦の年、十五才の米人が来てチョコレートケーキを作った 谷川利子／小学1年頃、日曜学校でキリスト誕生の劇で羊飼役をした 野木宗信／昭和30年代、大勢の使用人及び夫々一人一人にさまざまなプレゼントと食事 檜山とり子／明治学院在学中(昭和18年)のクリスマスの祈りと賛美歌 加藤三陽／昭和25年の「明治屋OSS」の飾りだけ 千代田栄次／受洗の年のクリスマス 高橋邦子／孫二人と家族と一緒にジングルベルを歌ったクリスマス 浦橋克行／子供の為にツリーのセツトを買い一緒に飾り付けた 佐野しづ子／初めて七面鳥の肉を食べた50年前 竹内進／誕生祝いもクリスマスも記憶にない。灰色の戦中、戦後でした 炭崎博／昭和25年、翌年の中学進学に万年筆を頂いた 三ツ木宗一／敗戦後友人と町の教会へ 小俣英之助／幼稚園でのクリスマス会。聖劇で三人の博士役を 長峰正晴／子が3才になった時、クリスマスの意味がわかった 鈴木義雄／昭和22年友人に誘われて行った飯田橋の富士見町教会 渡辺嘉幸／昭和19年上の友が「今日はアメリカの正月だから空襲はないぞ!」と言った 藤沢健二／小学生の時、江戸川乱歩の「水晶の栓」を買ってもらった 富樫和子／公立幼稚園の時、朝鮮釜山府宝水町にあったメソヂスト教会に友達と行った 田邊美代子／今までクツ下に物が入ったことがなし 北岡晃／終戦後間もない21年頃、駐留軍の家族間のクリスマスでラジオ報道がなされ、幼心に憧

れと羨ましさ強く感じた 村木尚／女友達から貰ったネクタイ 大橋恒次／多分30年頃、ある人が日本人は東洋も西洋も同じにするから金が掛るとなげいていた、同感 羽田桐柳／農村育ちで記憶ほとんどなし 森白樹／「満月の中央にある聖樹かな」以前森澄雄先生にとってもらった 津田忠彦／昭和24年友人とダンスホールへ。大阪ナンバ近くのホールは満員で汗をかいて踊った 奈倉楽甫／小学校3、4年の時、雑誌「少女」か「少女ブック」、表紙は松島トモ子さんの童謡歌手 福田和子／結婚して初めて二人で迎えたクリスマス 高柳閑雲／50年位前、子が幼稚園でトンガリ帽子をもつて帰った。その晩ケーキを買ってツリーを作った 石原学／母が夜中に靴下の中にお菓子を入れ枕元に置いてくれた 三津木俊幸／子にプレゼントを買い、数日隠して喜ばせ 大場きよし／高校2年生、はじめてボーイフレンドとデートをした 櫻井文子／長男の幼稚園のころ(昭和35) 田中昶／小学1年の時、家族皆で飾りつけをして聖なる歌を合唱 北村純一／小5の頃、友達と一緒に作った野暮ったいケーキ 小林七重／クリスマスなんて知らなかった。子供が生れてはじめて。プレゼントを贈うのも大変な時代でした 安部勝衛／小学校低学年の頃、そういうものを知ったと思う 忍正志／高校生だった昭和30年頃に見たビング・クロスビー主演の「ホワイトクリスマス」を思い出す 川崎洋吉／妹と一緒に小学生の頃、毛糸のタイツを枕元につるして楽しみに 大橋絵代／田舎育ちの小生には記憶なし 伊藤修敬／家に飾りつけたのは長男の子供時代 佐々木都／S30年代、宗教は関係なくケーキが食べられることが嬉しかった 黒田のみ子／小学6年生の頃、妹達と靴下を枕元において寝た 今井岩夫／上京して1年目のクリスマス 浜田蛙城／S37年子供が出来てから 林

ゑみ子／小学3年生の時クラス会で山にツリーの木を切りに行った。松の木でした 濱田イサオ／ミッションスクールのクリスマスに参加したのは忘れられません 鈴木与平／カリブ海の島で外国人がアメをくれチューをしてくれた 神作洸江／小学1年生の頃。長姉が長靴に入ったプレゼントを送ってくれた 今井勝子／子供の頃はクリスマスはなかった 水永ミツコ／50年以上前友達とのソロバン塾でツリーとクリスマスソングに感動! 中林恵子／戦後、宝塚劇場で催されたクリスマスパーティーで再開(現・夫)した日 矢野絹枝／4人の子供が小学生の頃電飾のキラメク台がありジングルベルやきよしこの夜を唄ってくれた 村上千代／7年前、アメリカ人と結婚した娘の親の家のクリスマス。なんと離婚した相手も出席していた 清水伶一／5年前の初孫のクリスマス 早矢仕邦夫／半世紀前子供がもの心ついた頃主人がケーキを初めて買って来た 大久保アヤ子／小学校1年頃、靴下にサンタクロースがくれたプレゼントが! 居原田連星／金もなくデートしたこと 野村牟人／戦後初のダンスパーティー(昭和25年) 野田明夢／子どもが生まれ、ほととした年のクリスマス 田村淳子／老うごとにビールの味が変わる様に思います 松田義登／少女の日、靴下を柱にぶら下げて寝たのに何も入っていません。親は知らなかったのです。竹本惇子／小学校に上る前?美しい「パンピ」の絵本をもらった 山本直子／戦中派にはクリスマスなど外人のやる事と思っていた 清まさじ／中学生の頃先生から少しづつ聞き初めて知った。ケーキのこと... 佐伯セツ子／戦争多忙に青春耐えた人生クリスマスなど夢でした 佐野幸平／長女の初孫が2才の時に家で小さいケーキで祝って食べた、それまではキリスト教だけが祝うものと思っていた 松尾正一／私共の子供頃のクリスマス

A Q U E S T I O N N A I R E

記憶はありません。親になって子がサンタさんへ「これが欲しい」と手紙を書く姿に親の責任を感じた。佐藤正子／昭和31年長男3才のとき。サンタの服装で記念写真を撮る。百花清／学生当時(太平洋戦争勃発直後の聖書研究会。神田九十九／母が善哉を作ってくれた。福岡悟／クリスマスと言え、この年代では戦後の日本民主化時。須澤重雄／教会に憧れ一杯だったのに牧師さんの行動に夢破れた記憶。高野春枝／息子は小学校4年生まで靴下を枕元においていた。杉村美保子／ピノキオの本が枕元に置いてあったうれしさ。藤井碩子／マンドリンだけのホワイトクリスマス。湯浅芳郎／17歳の時カトリック教会で一夜を過ごした忘れられない深夜のミサ。寒川靖子／自分が子供の頃はクリスマスなんて知らなかった。布目雅之／5、6才の頃朝トイレの窓から見えた雪。安木沢修風／小学生4人連ねて神田のニコライ堂。行き内部の豪華さにびびり。小島宇人／社会人になつてはじめてのクリスマス。須田洋子／長女が2歳のときマイホームでささやかに。井上静夫／戦後間もなくの幼い頃、母が「たばこ」の銀紙を伸ばしてツリーの星を作ってくれた。木田亜津子／昭和一桁生れ、クリスマスチャンでないのに記憶に残るクリスマスなんてない。久本に地／旧女学校1年の頃父に初めて買ってもらった漢和大辞典。堀木和子／就職して会社のクリスマスパーティーが初めて。小恵美子／40年余も昔、当時勤めていた会社の組合主催のクリスマスのダンスパーティー。勢川直美／小学校低学年の頃、靴下にミカンが2つ入っていたのを思い出す。中嶋秀次郎／もみの木を花屋さんからプレゼントしてもらい父母、祖母、私の4人で阿部家オリジナルのクリスマスツリーを飾った小学校1年生の頃。阿部澄江／初めて教会でのクリスマス。藤田君江／結婚して子供たちとケーキをかんだ昭和35年。小島秀雄／初めての子供が生れた時。竹内ハヤ子／昭和29年学友3名と居酒屋で熱燗で乾盃。内河邦久／教会で受洗

した年。木村俊彦／田舎育ちの農家でしたから残念ながら皆無です。大岩歌子／戦後すぐのクリスマス。まだ学生でしたが夢のように思っていたクリスマス。友人達と楽しみ隔世の感が。萬濃その子／子供が幼稚園でハンドベルの演奏、冷や汗もので忘れられません。棚橋麗未／サンタクロースがいると信じていた子供達の枕元にプレゼント。紺谷睡花／母が亡くなった12才のクリスマス、小さいクリスマスツリーを飾った。秋谷静子／大正生れ、クリスマス今もやりません。宇田川正雄／昭和20年のクリスマス。イヴGHQのビルだけが明るかった。齊藤安弘／朝起きたら枕元の新しい靴下にお菓子が一杯。サンタさんだ！と小躍り。山本敏順／昭和28年金の玉子として上京入社し会社の同期会で迎えたクリスマス。山岸伊久雄／まだこれがクリスマスだというクリスマスを知らない。前川久宜／両親が幼くして死去、社会人となって初めて友人達と楽しい夜を過ごした。村松知津子／50年前料理教室で教わってデコレーションケーキを作った時。駒場京子／昭和25年の東京山ノ手線の車内。クリスマスの夜の三角飾帽の若者がハシヤイでいた開放感。諏訪杜夫／ダンスパーティー。老沼正一／街は賑やか、懐は寂び若者だった。工藤昌見／小学生のころシングルベルの歌を教わった。藤沢今日民／昭和38年、結婚して初めて迎えた叔母の家での大勢のクリスマス。竹澤茂子／亡き祖父がお菓子の入ったサンタの靴袋をくれた。桑原謙一／昭和20年戦争に負けた年、平和でいいなと思つた。千木良宣行／幼稚園児の頃、毎年頂いていたクリスマスケーキ。北嶋八重／小学生の時、地区の子供会で知っている人がサンタクロースになり一軒一軒回っている。中島久光／ロソクを立てただけ。廣瀬喜代子／22、3歳頃の案内と知り合った初めての冬、生れてはじめてのクリスマスケーキを贈った。延原令岱／長男出産後ケーキ囲んでの家族写真。堀田寿美子／サンタクロースの正体が両親であることが真夜中に露見し、子供は「ヤッター」

と叫んだ。橋本世紀男／子供達は夜8時半頃まで私の帰りを待っていました(ケーキを)。増田信雄／父母が枕元にプレゼント、サンタさんが置いて行つたと。柳澤京子／職場でみんなで唱つた。五十嵐勝敏／小学1年生になった娘が「今夜サンタサンが来るから煙突はどこに靴下を下げる場所は？」と真面目腐つて言つた。田中豊恵／ケーキの回りにジンタンが光っていた。高松ゆか／物不足の時代、近くの教会のクリスマス。早川述史／子供が小学生の頃、本当に喜んだ笑顔は忘れない。仁科美代子／復員後田舎の風習に馴染まず上京する食糧難のころ、いっそ空腹、蒲田商店街で聞くジングルベル。原田麦吹／子育て中、親子で楽しんだクリスマスが一番の思い出。奥那於子／故郷を離れて独立し家族全員でセルフタイマーを使って撮ったプレゼント会。仁藤ひろじ／初めてのイブに出会った今の妻。松田重信／昭和33年代後半長浦カトリック教会で初めてミサ、静かで厳肅なクリスマス体験して以来今も続いている。中村和弘／学生時代、英会話塾で進駐軍とパーティーでココラを初めて飲んだときのあの味！羽根田明／スーパの夜間店長時代、クリスマス近くになると飾りつけ等、又売上等とせわしく駆け廻つた。高杉杜詩花／小学1、2年生の頃、父が買ってくれるケーキと翌朝の枕元のプレゼントが楽しみだった。三浦八千代／目が覚めたら枕元にキラメルキューピーを乗せる乳母車の玩具が。大阿久雅子／もう60年も前の事。朝起きたら枕元にプレゼントが。当時としては仲々シヤいな両親？。辻升人／小学5年時に近隣の教会へ行つてお菓子をいただいた。北野耕兵／ラジオも新聞も受けてない貧農に生まれ育ちクリスマス行事全く知らず。藤井春三／昭和31、2年教人の仲間と小さいバーで一年の回顧をした。小山たけし／長女が幼稚園の頃、枕元へ置いたサンタさんの菓子袋。神一男／主人と付き合ひ始めた頃、銀座を歩いた思い出。堀井和／初めて東京、新潟のキャバレーでパーティーが催された

折のこと。尾崎良雄／アイスケーキを食べたクリスマス。長尾俊彦／彼女にもつた人形。堀井酔人／東京の仮住まいで娘と2人ささやかな乾杯。二ノ宮利江／米国留学中、ゴールデンゲートブリッジにてワイフと2人で迎えたクリスマス。古谷力／究極の山中に生れ育ち正月も鯉職も行事は月遅れクリスマスなんて全くの天国の事。佐藤政實／初めて都会に出て働きた頃のジングルベル。伊藤みさ／結婚直前のイヴに主人の友達の家でオールナイトで愉しみ靴とバックをプレゼントされ今でも大切に持っています。池田岬／終戦のクリスマス。岡深也／今年50才初めて電飾付ツリーを飾りました。野原香雪／昭和45年頃足利のダンスホール。村岡盛英／入社して初のクリスマス、男性社員の誘いを断り女友達と出掛けてしまった。良い出会いがあったかも。中山日出子／ツリーをテラスに飾つたら火事と間違われて消防車が駆けつけた。秦幸子／初めてツリーを飾りつけた時の子供の笑顔。齊藤タカ子／小学生の頃枕元に本が；母からのクリスマスプレゼント。本間七蓮子／子どもが生まれ一本のロソクで祝つた40年前。岩崎令子／飲んで騒いだことしか記憶にない。長野操／妻がガンで入院した年のクリスマス(末期でそのまま)。篠原三郎／入院した病院で看護婦さんが患者さん達を集めて開いてくれたクリスマス。吉澤昌美／仏教徒であるが、子が小学生の頃「しつけのため」と教会に。森崎榮久／新宿駅近くのバーでクラッカーを打ち鳴らした。吉村充治／大家族時代7人が皆元気でクリスマスケーキにナイフを入れた。田野井一夫／バタックルームの小さなケーキ。岸田晴代／長男のはじめのクリスマスケーキを倒して大騒ぎした。行方素芳／キリスト教会でイブにイエスの血と言つて赤ワインを飲んだ。鏡たか子／戦後花巻温泉で見た米兵家族のクリスマス、ガム・チョコなどたくさんもらった。安藤まこと。他、子どもの頃にクリスマスが存在さえ知らなかった、という声が多数ありました。

第14回日本自費出版文化賞 作品を募集中

「日本自費出版文化賞」は、一般の人の目に触れにくい自費出版物に光を当て、著者の功績を讃え、かつ自費出版の再評価、活性化を促進しようといわれているものです。募集対象は日本国内で2001年以降に出版され、主として日本語で書かれ製本された著書が対象で、著者の国籍は問いません。

以前、弊社より出版し受賞された作品もありますので、ぜひこの機会にチャレンジされてみてはいかがでしょうか。

■受付期間

2010年11月1日～2011年3月末日

■応募方法

所定の応募用紙に必要な事項を記入のうえ、応募著書1冊と共に郵送または託送（応募著書は返却不可）。

■応募料 1冊につき1,500円

■申込先

〒103-0001 東京都中央区日本橋小伝馬町 7-16
日本自費出版文化賞事務局

■募集部門

- 地域文化部門 ●個人誌部門
- 文芸 小説・エッセイ部門 ●文芸 詩歌部門
- 研究・評論部門 ●グラフィック部門

■賞金・賞品

- 大賞 賞状ならびに賞金20万円(1点)
- 部門賞 賞状ならびに賞金5万円(各部門1点)
- 特別賞 (各部門1点 協賛各社賞になります) 賞状ならびに記念品
- 入選 賞状(各部門10点程度)

主催 社団法人日本グラフィックサービス工業会

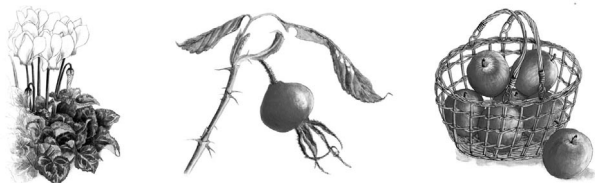
主管 NPO 法人日本自費出版ネットワーク



オリジナルポストカード 好評発売中!

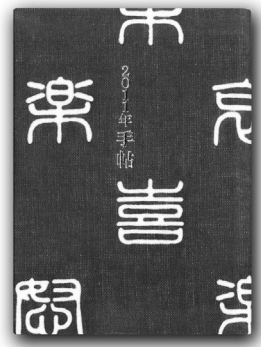
季節毎の彩りをさりげなく配した弊社のオリジナルポストカード(1組8枚入り500円)。毎回ご好評をいただき、たくさんのお申込みをいただいています。今回は冬バージョンの中より「雪の結晶」を同封いたしました。お気に召していただいた方は、同封のアンケート用紙にご希望の季節、セット数を明記のうえ、必要金額分の切手と一緒に封書にてお申し込みください。

【冬バージョン】雪の結晶／シクラメン／イチイの実／ローズヒップ／リンゴ／サルトリイバラ／スノードロップ／ウバユリの実



まだ少しあります! 2011年手帖

お申込みの方には既にお送りさせていただきました「2011年手帖」。若干ですが、まだございます。手拭いに「喜怒哀楽」の文字を染めた今年の表紙はえんじ色。アンケートには「一段とすばらしくなった」「書き始めるのがもったいないくらい良い手帖」「毎年少しずつ改善されご苦労の程がうかがえる」「ラッキーカラーで良い年になりそう!」などうれしい声が届いています。ご希望の方は、お早めにご連絡ください。



Q. 記憶にある一番最初のクリスマス

木戸 敦子



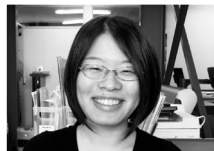
毎年ワクワクしながら3番目の兄とツリーを飾るも、脱脂綿で作る雪がどうしてもフワフワとできずドカ雪の塊状態。兄らから「ブー(敦=とん)へったくそー」と酷評されブーたれていました。

古川 久美子



サンタさんに手紙を書いて、返事が来たような来ないような…? 毎年ひっそり枕元にプレゼントが置かれてありました。懐かしい……。

菅 真理子



サンタさんにお手紙を書き、机の上に置いて就寝。翌朝見てみると英語でお返事がありました。数年後、両親が必死になって書いてくれたことを知ったときのありがたさと嬉しさ。

仲由 真実



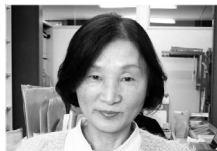
朝、枕元に手紙があり見ると父の布団の下を見るように指示が。寝ている父の布団をめくって手紙を発見。回り道をしてながらプレゼントに辿りつき…。とても疑ってられるサンタさんでした。

上村 真智子



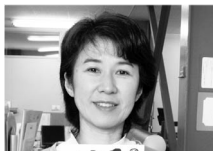
小学3年のクリスマスの朝、思いがけず枕元にプレゼントが!! しかもなかなか大きい!! ワクワクして開けたら、アルバムだった…たまたま必要で買ったものをクリスマスプレゼントにされたのだ…エコな親だ

金子 ゆり子



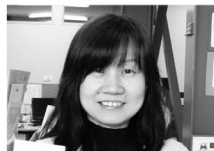
息子や娘が小さな頃は一緒にツリーの飾りつけなどをしたり、ケーキを買ってきたり、何気なく聞いておいたプレゼントを買い、子どもが喜ぶ顔を見るのが幸せでした。

石山 由希子



昭和40年代…ごんぞさ(近所の八百屋さん)のおじさんがサンタの扮装で家までケーキを届けてくれました。おじさんだとわかって私、照れ笑い。ごんぞさのおじさんも照れ笑い。

山田 千秋



子供達がまだサンタクローズの存在を心から信じていた頃、何日も前から、待ち焦がれ、プレゼントがあった時のあの満面の笑み…。かわいかったなあ。もう一度見たいです。

吉田 瞳



「けけけのきたろうこなきじ」去年息子が初めてサンタさんに手紙を書いた。なんて愛くるしいの～思わずギョッとしてあげた。実は…私も同じことをしてたらしい(笑)

●お客様の「リレーエッセイ」

吉村昭と俳句

山口景昭

舎人ライナーというモノレールの新線ができて、私は時折り乗車して利用している。足立の舎人公園を通る日暮里へ向かう線である。

日暮里は昔は北豊島郡に属して、下谷根岸の里も近く、上野の山から東北にある地帯で、季語に「根岸の里のわび住ひ」と詠めば大方の句ができるといわれた場所である。

近年の日暮里は布地の販売で名を馳せているが、この新しくできた高架線の駅の東側のエレベーターをおりると、蕎麦太宝家の店の真ん前にでる。漱石の蕎麦の注釈によらなくとも、蕎麦好きの私は近年の価で盛、掛が五百円を上ると高価であると理由づけている貧乏性で、太宝家は私にとって大発見であり、日暮里に幾多ある蕎麦の中でも、この店の味の味わいを鼻肩にして足繁く通っている。

東日暮里の綿谷の八男に吉村昭は一七二七年五月生れと年表にある。妻は津村節子。一九四七年旧制の学習院高等科で岩田九郎教授の薫陶を受けて俳句を詠み、川端康成に傾倒しながら学習院の文芸誌「赤繪」で文芸委員長として活躍した。この頃三島由紀夫とも会って著名本を貰っている。津村節子が一九六五年芥川賞を受賞すると、これからは細君の紐になれると喜んだと噂話も残っている。

丹羽文雄の文芸誌「文学者」のメンバーでその雑誌が廃刊になる頃の

一九七二年五月号に「最下位と最高点」という随筆を載せた。

神田神保町の某旅館で催された「ホトトキス」の句会が私の初対面であり、浅草のお西さまの筋向いの料理屋梵の句会のことをこの随筆には書かれている。後に一九七九年講談社から上梓された「白い遠景」に掲載されていた。

「ホトトキス」という巫山戯けた名の句会は塩田丸男が、中川上流に舟を浮かべての句会で名づけた。この句会のメンバーは「婦人公論」の記者仲間竹久夢二の次男不二彦、当時早川書房の編集長の三戸森毅などが常連で

稲妻や物語めく舟の宿

円翁・塩田丸男

大漁旗群る中に蝶の群れ

春蟬・吉村 昭

姫初鳩の目入れる小筆哉

佐伯孝夫

ほかに中村武志、稲葉真弓などゲストでいた。

吉村昭を誘ったのは「婦人公論」の白岩記者で「最下位と最高点」の話に、学生時代の講議に遅刻した弁明を「今日もまた桜の中の遅刻かな」と詠み俳文学の岩田九郎教授にだし、それを教授は黒板に書き書いて授業を続けたと津村節子が「婦人公論」の随筆に書いたことから、かねがね俳句は名人だと細君に豪語していた手前もあり、ホトトキスのメンバーが殆ど素人だと踏んでの出席であった。兼題が「湯豆腐」と「屏風」、席題に「春雨」「日向ぼこ」だったと、私はその日の季題について、とうに忘れていたが、九名中二、三人をのぞいて俳人らしい風格に乏しいといながら、最高点になったが「天」に推す人がなくて、次点の人が最高位となった。

私はその日の優勝カップを攫って帰った。

新潟ぶらり

※海の洋館 ネルソンの庭

古町から日本海へ向う途中に、古い洋館がある。海の洋館、ネルソンの庭。新潟の情報誌でおしゃれなイタリアンのお店としてよく紹介されている。調べてみると歴史のある建築物とのこと。古町から歩いていける距離にある。

ネルソンという名前の西洋人が大正時代に建てた洋館で、地元の人々は「海の洋館」と呼んでいたそうだ。ネルソン自慢の庭に友人たちが招かれて楽しいパーティーが催された…。というのがお店のコンセプト（調べてみたが本当のところは分からなかった）。

大正時代に建てられた旧副知事公舎をリノベーションしたレストランである。財政再建のために売却が予定されていたが、市民団体などによって建物の保存と活用の要望が出され、今に至っている。和室は新潟県により保存対象となっている。

11月下旬の週末、ランチをいただきに訪ねてみた。色鮮やかな紅葉の樹の脇を通って入口へ。瓦屋根にガラス張りのドアを開けると、フロントの奥には和室がある。落ち着いた雰囲気にはホッとする。「大正ガーデン」が眺められる席へ案内された。

「火垂るの墓」「おもちゃのチャチャ

チャ」で知られる直木賞作家・野坂昭如も戦後高校生時代をこの洋館で過ごした。昨年の第四回安吾賞新潟市特別賞も受賞している。副知事だった父・相如の仕事柄、客人の接待が多く、安吾が洋館に宿泊した際も布団敷きを手伝ったそうだ。

歴史ある建物で食事ができる贅沢…。カフェやダイニングなど、部屋ごとに違う雰囲気も楽しめそうだ。次はクラシックが流れているというバーにも行ってみたい。
(仲田真実)



◀新潟の鮮魚やかきのもと(食用菊)を使った料理をいただいた



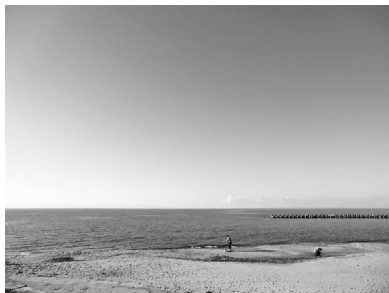
住／新潟市中央区営所通2-692-6
☎／025-224-7851

※冬の日本海

新潟の冬の、鉛色の空に、すっかり沈鬱な気分になってしまふ人は多い。新潟の冬の、沿岸部の風の強さに、来新された人は驚く。雪が、真っ白で、しんと降り積もって、何かあたたかいイメージをもつのに対し、鉛色の空と強い風は、重苦しい、つらく厳しい、長い冬を思わせる。

冬波の百千万の皆起伏 高野素十

冬の強い風は、海の水をうねうねと波立たせ、海岸にぶつける。私がみたあの景色が、そのまま浮かんでくる句だと思った。この景色こそ、新潟の冬。雪しか冬のイメージがないと話す県外の友人に、これをこそ見せたい、と思っただあの景色が、この文字の中にある。沿岸部からみる海のうねり、波しぶきはそれは見事である。東映のオープニングは千葉県銚子の犬吠埼だということだが、まさにあれである。車の中からみていると、それだけで酔いそうになるくらいだ。



掲句を詠んだ高野素十は、茨城県出身。俳句をはじめたのは、東京帝国大学医学部の先輩である水原秋桜子の

手引きがきっかけだという。高浜虚子に師事し、素十の名は、虚子が「素質十分である」との意からつけたというから、なんともすごい話である。知らなかったのだが、「ホトトギス」の四Sというのがあり、それに素十が入っているという(ちなみにほか三人は、山口誓子、阿波野青畝、水原秋桜子)。

素十は、新潟医科大学(現・新潟大学医学部)の助教授、教授、学長をつとめ、中田瑞穂とは同僚であった。のちに中田瑞穂が主宰の俳誌「まはぎ」にも参加、さらに中田瑞穂を通して會津八一との交流も認められている。

素十の作風は、虚子の提唱した「客観写生」に忠実であり、自然を徹底して客観的・即物的に描写し「純写生派」と呼ばれた。難しいことはさておいても、素十のすごさというのは、目の前にその景色をありありと思ひ浮かべられる点、俳句を知らない人にも共感を呼ぶことができる点にあるのではないか。

海の写真を撮りに出かけた日はめずらしいことにとっても天気がよく、私の意に反してまったく穏やかな海であった。素十ならなんと詠んだことだろうと思いを馳せた。

(菅真理子)



一行の冒険

森賀まり

言葉を探しはじめて三十五、六年になる。振り返ってもどうして自分が言葉で表現する人になつてしまったのかわからない。今となつては手遅れだがそういうふうにならない人生もあつたはずである。きつと今よりも安らかで退屈だろう。

ときには俳句をやっているおかげで文章を書く機会があり、これが苦しい。いつそ俳句を詠む人にならなければよかつた、とはしんどいときとときどき聞こえる心中の声である。世の中には文章を書く際、まるであらかじめ書かれたものがあるように言葉が淀みなく流れ出るということが本当にあるらしい。だが私の場合は、暗くて長い廊下に手ぶらで立っているか、あるいは端切れを掴んで途方に暮れている。文章を書くときはいつもそんな心持だ。

だが俳句となると少し様子が違ってくる。私は手ぶらではなく、まず手に歳時記を持っているだろう。そして定型に助けられる。もともと多行詩を書いていたためか、俳句が備えている条件をあえて握りしめているという自覚がなんとなくある。

順番が違つて最初に出会つた表現形式が詩ではなくすんなり俳句であつたなら、私は現在のようなやり方で言葉を探していないだろう。季節に感応するなかで我が歩く道をおりおり述べていたのではないかと思う。

十七字の定型はわかりやすく入りやすく、俳句の言葉

残念ながらこのコーナーで森賀さまのエッセイを読めるのもこれが最後。じんわりあたたかな読後感に背中を押されます。次回から「執筆いただくのは、大学で俳句講座も担当されている「藍生」所属の女流俳人です。

は季語と定型のもとにその都度新しく出会う。句会の締め切り時間前の集中が最も好きだ。言葉はその短さゆえに関わり合い影響し合う。期待通りの世界などつまらない。俳句は一行で終結する短い冒険なのだ。一句ごとに別の展開があり、きわめてまれな成功が私自身を驚かせる。

ひし餅のひし形は誰が思ひなる
チューリップ喜びだけを持つてゐる
細見綾子

俳句をはじめたころ好きになつた句はすっかり記憶していて今でも新鮮な感動がある。たとえばこれらの俳句の持つ世界は当時ぼんやりと不思議だったが、その後ろにやわらかな不安や寂しさがあることに今は気づくことができる。

定型のなかに定着した言葉が、詠まれたあとも長く生きて私のなかで奥へ広がる。こうした句に心打たれ続けることができるのも、言葉探しを続けているおかげだろう。

俳句を詠むことは誰かのためではない。世界はよくなく善い人にもならない。生きてゆくために労働し、子どもに弁当を作り洗濯をする。俳句を詠むことはそういう私の内側をひそかに照らすだけだ。私はひとり自由になりまた少し元気になる。

●プロフィール

昭和35年愛媛県生まれ。波多野爽波、大串章に師事。「青」のほか、「水無瀬野」「ゆう」に参加。現在「白鳥」同人、「静かな場所」代表。句集に「ねむる手」「瞬く」。詩集「河へ」。田中裕明との共著「癒しの一瞬」。第三十三回俳人協会新人賞を受賞。

2010. 12. vol.53 (2010年12月10日発行/隔月発行)
●発行・印刷/株式会社ミュージズ・コーポレーション
〒950-0801 新潟市東区津島屋 7-17
TEL 025-250-9555 FAX 025-250-9550
喜悲哀楽書房 株式会社ミュージズ・コーポレーション
0120-819-395
e-mail odp@eseihon.com / HP http://www.eseihon.com

編集後記

句会、歌会、吟行と今年も様々な場にお邪魔させていただいた。その度に思うのは、その場限りのライブの良さと人の温かさ。それを伝えきれない未熟さでもどかしい。句や歌の会ではありながら、〇〇さん最近具合悪いみたい...という仲間の存在は有り難い。なくても困らないかもしれないが、年を重ねると一層こういった仲間が不可欠だと思える。「無縁社会」なる言葉が今年の新語の1つに選ばれた。所属する座を持つ皆さんの嬉々とした姿がうれしい。そしてこの「喜悲哀楽」がそういう場の1つであつたなら、なおうれしい。本年も誠にありがとうございました。(木戸敦子)